

広津柳浪「変目伝」論

——「人は美目より心」に託した伝吉——

平田 恵美子

序

「変目伝」は、悲惨な殺人事件が探偵小説のように展開される。一方、主人公の犯罪にいたる心理描写があり、硯友社の外形模写的写実主義が内面的、心理的になり本質的なリアリズムが描写されている。明治二八年四月の「文藝倶楽部」に発表された泉鏡花の「夜行巡査」は、小説界の新しい転進を告げた第一声にほかならず、これを契機として観念小説、深刻小説と名づけられる小説が誕生した。高須芳治郎が「好んで悲惨のために悲惨を描く傾きを示した。わるくいうと、柳浪は時流に阿るために悲惨を弄んだ」と記している。尾崎紅葉の一種の推理小説としての「不言不語」があった。抱月は「早稲田文学」に「探偵的と悲劇的との本篇に於けるは猶楯の両面如きか（略）悲劇の面に於て失敗せるもの」と指摘している。

なお、一ヶ月ほどあとに「変目伝」が出たのである。紅葉の

「不言不語」とはいくらかの相違があるが、柳浪は尾崎紅葉に影響されたのではないかと考えるのである。

塚越和夫は、愛欲により破滅したという性的欲望が自制的きかないものになったと論じている。直接にはそれも関係するが、根本的にはこの時期に於ける社会の前進によって生じた矛盾等に原因があるのでと考える。柳浪は、硯友社の同人ではあったが、伊狩章は、「硯友社の薄手な趣向小説の壁をうち破つて、新風を注ぎこんだ処に大きな意義があった」と分析した。柳浪は題材や人物などを外的な方面の深刻さに求めて異常残酷な条件を主人公に設定した。抱月は「罪悪のうちに同情すべき点を発見し、従来小説家が蛇蝎視したりし人生の一面に、新なる人情味の光を蒙らしめんとしたるもの」と言うこれらの悲惨小説は、紅葉を盟主とする硯友社文学には見ることでできなかった異質な眼があった。悲劇の原因である社会的矛盾を批判する眼がどのように作品に表現されているかを見ていきたい。

一人前の商人としての伝吉は「人は美目より心」の言葉が、引

き金になってお濱との結婚願望をもつことになる。伝吉の悲惨は、社会の本音と建前に弄ばれたことにあると考える。その理由を明らかにすることが本稿の目的である。

一 卸小売店埼玉屋と菓種店仁寿堂の社会的地位の格差

伝吉は、「神田淡路町に洋酒を卸小売店、埼玉屋の主人伝吉」である。この時代に洋酒屋が近代化と結びついていたかを見てみると、「明治初期における日本人の洋酒飲用は、国際的社交上からの必要性、文明開化の声に乗せられた珍奇好み、保健滋養に役立つという合理派が主なものであった」と解説されている。洋酒屋は、日本の近代化にともなつてこの時代に生まれたものである。

一八八〇年東京・浅草の神谷傳兵衛は葡萄果汁にアルコール、砂糖などを混和した模造ワインを製造、ついで輸入ワインを原料とした甘味葡萄酒「蜂印香窠葡萄酒」を普及させた。『美酒一代』によると、鳥井信治郎が「日本の葡萄酒界で最高の売れ行きを示していたのは、東京の「蜂印香窠葡萄酒」であった」と記している。その神谷の自伝の「神谷傳兵衛と近藤利兵衛」の中で、伝吉と同じように「麻布の酒屋へ奉公、随分困難な仕事であったが、二十四になるまで五カ年働き続けた。相当の貯金も出来たので、これを資金に独立開業、明治十三年の春、一本立ちとなつた」と

記している。「蜂印香窠葡萄酒」の広告文は、「栄養分に富み身体健康に偉大の裨益を興うるが為なり」と「健康」という言葉を掲げている。このことから、伝吉の扱う洋酒は、ほとんど滋養強壯を目的としていたことが窺える。

このように、舶来洋酒が日本人に多量に用いられる機会が、まず薬用、保健用、軍用として登場したことを示しているのが宗田一の『渡来薬の文化史』である。オランダ船が運んだ洋薬のなかに、「赤酒は其性、頭に冲騰すること少くして、胃に於て宜く、且つ滋養に堪え、身体中の諸物をして各其資性に適して、自ら其所を得せしめ、強壯ならしむことを主り、鬱憂を駆除し、中毒を治し、小水を利用し、月経を通し、氣を行らし、風を駆り」などがあると記述している。オランダ商館の医師たちによる医学が日本に伝えられたばかりでなく、漢方医学にさえも大きな影響を与えたと考えられる。このことは、作中の漢方医殺害事件である。仁寿堂の勝之助は「新聞紙を手にして、先づ雑報より讀初めたるに」「入谷村の人殺」と題する標目あり「今年六十七歳になれる漢家の老医」「斯残酷なる罪を犯せしに」で確認できる。

明治政府は漢方を否定する過程で医療の近代化を促進し、西洋医学を資本主義的発達の強力な武器とした。長与専斎が衛生行政の局長になり、漢方医否定の政策を積極的に打ち出した。このような差別が漢方医を奮起させ、漢方医存続運動が激しさを増す。西洋医を代表して長谷川泰は、大日本私立衛生会の例会で「医というものは病を撃つ武器であるが、漢方医はあたかも弓矢の如き

ものであり」とまた、「これに比すると西洋医は七連発の村田銃
でその優劣は言うまでもない。」と、「国家衛生の機関・裁判・軍
陣外科及び衛生の三分野における、医者^⑫の任務たるや重大であ
る」と述べている。

中丸宣明が論じているように、「往診に行く親かな老漢方医の
素裸で宙釣にされるといふ無残な死は、西洋化―近代化が暴力的
にまで人々の生活に関わる」現象を暗示する。一八九四（明治二
七）年に漢方側の浅田宗伯の死で危機におちいり、一八九五年の
第八帝國議會で廢案になり、漢方医の醫師資格の承認は遂に成ら
なかつた。その「激しい漢・洋医の抗争」により、人々は近代な
るものを実感させられたのではないか。広津柳浪は、この一連の
流れに関心をよせていた。それは、「変目伝」のすぐあとに發表
された「黒蜴蛭」の中で「今ぢや嚴重ツて、薬種屋だツてお上の
規則があるてえから」とお都賀に言わせている。

以上、明治二〇年代後半に伝吉が洋酒店を始めたころの状況を
見渡してきた。

伝吉は、幼いころより、身を粉にして働き、主人の信用を得
て、洋酒店を開いたのである。では、仁寿堂の薬種店経営者勝之
助はどのようなものであつたかを注目しておきたい。それは、川
上武が「明治政府は漢方を否定する過程で医療の近代化を促進
し、西洋医学を資本主義的發達の強力な武器とした」と指摘する
ように、「医制」にかけた明治政府は、明治八年二月五日、薬
舗の開業を志す者、薬舗の子弟で業務を相続する者は試験を受け

て免状を得るべきことを規定した「薬舗開業試験施行ノ件」を布
達した。明治二年二月一日、「薬律」と呼ばれた法律第十号
「薬品営業並薬品取扱規則」が發布された。第一条に「薬剤師と
は薬局を開設し医師の処方箋により薬剤を調合する者をいう」と
あり、従来の薬舗主は薬剤師に、薬舗は薬局に改称」とされ、第
九条には、「薬剤師に非ざれば薬局を開設することを得ず」と規
定された。

定二郎が医師の処方箋によつて薬剤を調合している場面があ
る。「医師の処方書を持参し、調薬を請へる客あり。定二郎は此
に便を得て、勝之助が前を脱れ、調薬に掛らんとせる折しも」と
右の「薬律」を意味している。

このことから、仁寿堂の勝之助は、試験を受けるために、薬学
校を卒業し、試験に合格して免許を受けたと考えられる。「甲種
薬学校は修行年限が三年、乙種は二年。乙種は、小学中等科卒業
の学力を有するか、読書、算術について小学中等科の学力を有す
る者としてゐる。この通則は明治四十四年まで続いた」この点か
ら考えて、勝之助は近代能力主義のもとである学歴社会の一員で
もある。この時期、中流社会としての暮らし振りがあつた。「日
用百科全書・家政案内」においては、「奉公人なき家には要なき
話ながら、大かたの家には一人二人の雇人あるが世の常なれば、
さてそが管理法のあらましを述べへし」（傍線引用者）とあり、
奉公人がいることを当然のこととして、下女の管理法を述べてい
る。「大かたの家には一人二人の雇人あるが世の常なれば」とい

うことから、普通の中流家庭は、「下女を置く」という生活である。ここで言う「下女」は、「乳母子守その他営業にか、つらはぬ雇人」と示したことからもわかるように、家事全般を執り行う使用人のことである。明治期においては、中流階級の生活は「下女」がいるという前提によってなりたつていてと小野一成は指摘している。

ややは下がるが、当時の和風住宅の「和洋住宅建築学」において、「第一 普通住宅所要の室 普通住宅には大抵左の諸室を備ふ」という、普通住宅所要の室に付された説明は、女中部屋三帖があることから、明治期の日本住宅は、女中を置くということが当然のことであるかのようなのである。家の間取りを見ると、明治の普通住宅でありつつましい住宅である。「立派な店を持つていゝ一軒の主」であるにもかかわらず、伝吉は「下女」を置けない階級に属するのではないかと考えられる。

仁寿堂の勝之助は伝吉に比べ社会的資源・経済的資源（金や物・関係的資源（人脈やコネ）・文化的資源（教養や学歴）を多く保有していることを示している。その差異は、田岡嶺雲が「十九世紀の所謂文明開化なるものは富者に厚きの文明也、自由の名の下に貴賤の階級を打破せりと雖も、貧富の隔絶はこれにより益々太甚だしきを加えたり」と記している。この言葉は、ブルジョワ的である勝之助にあらわされている。薬舗主は薬剤師の資格試験が制度化されたことにより、一定の学歴がなければ受験できなくなってしまうのである。学歴が立身出世の通行手形であ

る。また、仁寿堂は薬品の販売だけでなく、医師の処方書に基づいて調薬を行う店として設定されている。当時としては、より多くの富を得て、先端をいく店である。

二 伝吉の「尋常」でない身体

伝吉の「尋常」でない伝吉は二七歳でありながら身長は一メートル程度の小男であり、「左の後背より頬へ掛け、湯傷の痕ひつゝりになりて、後背を豎に斜めに鈎寄せ、右の半面に比べれば、別人なるが如く見ゆ」と言う異相の男で、「蜘蛛男」「侏儒」「変目伝」と渾名をつけられている。このように、伝吉は「肉体的欠陥」を持つていて。ここで、「尋常」に「ひとなみ」とルビがふられ、また、「不具ぬ」に「ひとなみならぬ」とルビがふられている。

柳浪の意図的な表現であつたと考えられるが、以下にその点を考察したい。

伝吉は、二七歳の男子である。「近代思想体系」「軍隊／兵士」の中で、「徴兵は国民の年甫めて二〇歳に至る者をし、以て海陸両軍に充たしむる者なり」と記している。また、常備兵免役概則では、「第一条に身の丈け五尺一寸（曲尺）未滿者」「第二条に羸弱にして宿痾及び不具等にて兵役に堪ざる者」としている。このように、伝吉は身長及び不具者ということで「常備兵免役概則」と重なり合っている。中谷猛は、徴兵の書式は「国民」の創

出の視覚からして看過しえないと見ている。とくに「人別明細連名簿」の記載事項には、職業、思想信条、身長体質、算筆能力のほかに該当者の個人的容貌の特質（顔、額、目、口、鼻、顎、髪、眉）を要求していると記している。

欧米人並みをめざす体育向上は、明治政府の基本路線である富国強兵のもとに必要な最低条件であった。健康Ⅱ兵力により、国民を「ひとなみ」という国民的身体に「ふるい分け」することであり、近代日本を根強く支配していくと考える。この伝吉の身体は、明治政府がスローガンにしている「強兵」とは、相反するものと考えていいだろう。避けがたい結果として、伝吉には生きにくい時代となったのである。

また、伝吉は、仁寿堂と呼ぶ薬種店の小僧三吉に「やア変目……」と言われる。明治期にこのような不具者はいたのであろうか。『明治世相百話』の中で、一、二年頃から二〇年頃まで浅草の奥山はじめ市内各所のお開帳の時などに出て大当りを取った蜘蛛男というのがあったと記している。年齢はそのころ六〇歳前後、禿頭に小さなチョンまげ、派手なメリンスの衣裳、顔は大人並の爺さんだが身の丈は二尺五寸、細い両手は指までが寄せたようにについて、足も三四歳の赤ん坊ぐらいで当時は評判男であったというものである。また、『見世物の歴史』の中に「奇形児を仏教の布教が因果応報と説く教理の具として見世物あつかいしたらしいのである」とある。当時目撃した内田魯庵翁の話で世話人は滑稽な身振りで「この太夫さんは、これで中々お女中好きで」

「お気に召した別嬪さんがありますかね」というと「蜘蛛太夫唯ウフ……と不気味な笑い方をしながら」、「客席を指差すので、客は一斉にドッと笑声を揚げたものだ」と話している。また、『黒蜷蜥』においても、大工吉五郎は、與太郎の妻お都賀に「蜘蛛の隻目と来ちやア、昔なら両国だが、今ちやア奥山もんだ。生まれた其子が蛇男、親の因果が子に報う、やア評判ちや〜」と呼び込みの口上を言っているのである。伝吉の渾名は、見世物芸人の「蜘蛛男」と結びついていると思われる。『最暗黒の東京』では、下層社会を的確に記述していた。そこにいる「畸型異形」は、伝吉と酷似しているのである。産業革命が開始された明治二〇年代、「貧民層」は、東京市内に相当広範に存在していたと考えられる。『都市と技術』の中では「明治維新から東京市の人口は、明治二〇年前後に大量の流入を経験して一〇〇万人の水準に復帰するが、これら流入人口の多くは「貧民層」を形成していたと指摘されている。

この下層民である芸人の蜘蛛男と伝吉は、同じ差別される人間として捉えることができるのである。また、伝吉は「物淋しき折など、遊ものとして待る、事もありけり」と見る人を面白がらせているのである。蜘蛛男や侏儒は、社会的には貶められた集団であり、「能き遊び物」としていたのである。

洋酒屋の伝吉は、「一寸法師」「不具者」「変目伝」といわれる身体をもって生きてきた。「斯して店を張ってお出だと、世間体もあるし、萬事に不自由をお為だし」と母親が言うように、伝吉

には、将来に対する希望がある。前述の「現金の貯蓄も相応に出
来、二間の間口を近き中に三間にしてなど」と出世願望や上昇志
向がよみとれる。また、母親が「早く好い嫁を与がいが、初孫を膝
にしたく」と「家族」が語られるのである。それは、明治二〇年
代に入ると、健全で温かい家族が望ましいものとする意識が出現
し、「望ましい家族のあり方」「新しい家族像」として喧伝されて
いた。

三 「人は美目より心」の伝吉

仁寿堂は伝吉の第一の得意先で、主人の勝之助は商売相手であ
る。伝吉が勝之助の妹お濱の誕生祝いに来合わせ、奥へ誘われ
た。仁寿堂の人々の視線が、「遊びもの」として伝吉をどのよう
に扱っているかを見ていく。

自分は女に愛されず、優しい言葉もかけてもらえないと諦めて
いた伝吉がお濱に手を握られ「伝さん、おいや。私のお酌では、
おいやなの。お酌ぐらい為せて下さつたつて、能いではありませ
ん」と声をかけられる。ストーリーはここから展開していくのであ
る。この場面で、お濱の「兄と定二郎とに顔を見合せ、袖もて口
を押へつ、笑を忍びて」と「能き遊び物」として、面白がる視線
は、兄の勝之助、定二郎と同じである。伝吉の「いひいひ」「え
へ、えへえへ」と「笑声の可笑きに、人々どつと笑へば」は、先
述の「見世物小屋の蜘蛛男」を見る観客の視線と重なりあう。

伝吉は若い女性に愛されず、優しい言葉も掛けられることなく
二七歳まで生きて来た。幼い時より除けものにされてきた者には、
「能きあそびもの」扱いされているなど知るよしもなかった。
肉体的な欠陥は、成長過程において伝吉が社会化していくために
は、マイナスの要因となったのである。社会化には、社会的規範
や制度を理解し、意志を交換しあう能力、礼儀、公共心、責任感
などの社会生活上の側面が含まれている。

恋や結婚から疎外され、「春を思ふこそ儘ならぬ」と自覚して
いたが、「我は女に愛されず、優しい言葉を掛けらるゝ事なしと
諦らめたる伝吉」がお濱に手を握られ、心を奪われてしまう。お
濱は伝吉を「気味悪きながらも興ある」「遊びもの」として面白が
る視線は、仁寿堂の人々の視線と共有しているのである。お濱の
気まぐれは、伝吉の心の中に押さえつけられていた「春を思う
心」を芽生えさせたことにはかならず、伝吉も「春を思う心」に
のってしまつたのである。

伝吉は、商人として利潤を追求する努力を惜しまなく実行した
人間である。お濱を手に入れるための努力も同じように商人的な
発想である点は見逃ごせない。冒頭の小僧三吉に「白銅貨一枚を
投出したたり」、定二郎に「馳走ならば、馳走ませう。欲し物は進
ませませう」とお金をちらつかせることから見出されるからであ
る。そのようにしてまで、お濱を嫁にしたいという理由がある。
それは先述でも述べたように商人として成功した伝吉にとつて、
お濱を嫁にすることで、さらなる上昇への夢想を考えたのではな

いかと推測するのである。伝吉の「春を思う心」は、定二郎・伊勢屋の番頭常蔵によりどの様に破滅へと追い込まれていくのかを検討する。

定二郎について、塚越和夫が「手もなく狡猾な定二郎にふり廻され」と否定的な評価を下している。定二郎の言葉を通して考えてみたい。

伝吉がお濱に恋心を抱き、毎日仁寿堂に顔を出すようになる、定二郎は「伝吉が意中を覚りて何だ変目伝の侏儒め、人並にお濱さんを張に来る処が可笑い」と心中で思うが、「馳走のなり徳、構うものか」と「何てもお望み叶えましょう」という伝吉の言葉をとらえて吉原での遊びを所望する。伝吉は「遊びに慣れざる哀しさには、云はる、儘に貪ほられ、定二郎にはお濱の一条を頼みたる弱みに、時貸の二円三円置りて百円近くなりたれば」と、と、蓄えを瞬く間に使い果たして家を借金の抵当に入れることになってしまふのである。お濱の気持ちを確認するために伝吉は、定二郎に「一生後生のお願なれば、定さんの働きを頼みます。其代には、何にてもお望み次第、馳走ならば、馳走ませう。欲しい物は進ませせう」というが、この言葉は、どんなことでも金銭で処理できるとする商人的発想である。お濱との仲を取り持つてもらうため定二郎を頼みにするのである。先述の塚越和夫の言う「狡猾な定二郎」は、果たして伝吉をどの様に見ていたのだろうか。

定二郎は伝吉が「お濱に恋慕せる始終」をお濱に語り聞かせ

る。お濱に「定さん、お前さん本統に其様事云つたの」と、定二郎は「馬鹿に為て遣うと思つて、面白半分には、は、は、は、と言つてのけるのである。定二郎は、伝吉を友達のように付き合つていたが、伝吉がお濱に想いを寄せているのを知ると、「何だ変目伝の侏儒め、人並にお濱さんを張に来る処が可笑い」と面白半分にお濱を騙すのである。伝吉が憎くて、陥れようとしたわけでないが、最後まで伝吉に対する態度は変わらなかった。定二郎に就つて伝吉は、「尋常ならぬ」身体の小ささと傷痕という異形なものであり、差別されてもいい人間であつた。実際にあからさまな態度はとらなくても内心ではその人を認めないという態度は、定二郎、勝之助、お濱にも共通だつたと言えるのである。特に定二郎は当時の「片輪者」に対する世間の見方を代表するものとして捉えることができる。

伝吉の「春を思う心」は抑えきれないほど突き進んでいくことになる。伝吉の借金が嵩んだ原因は性的欲望よりもお濱への思いを定二郎にかなえてもらうためにあつたと考える。伝吉は、吉原の遊びは「夢の心」になつたということもあるが、「お濱の事は露しも忘れしにあらざりき」とあるように、進展しないお濱との関係と「二人の名の頭文字がついた縫取りの写真挟み」を持つ気持ちがあつたと考えてもいいのではないか。「其と云はねど互の心を通はす棧橋となさん」と、定二郎に間を取りもつてもらふ願いがこもつていのである。伝吉は、定二郎から聞きえたお濱の情報に「我と許嫁の如き心地するお濱の様子に、定二郎我意

を通じたる微も見えて、顔を合わすれば赧くなりて走り隠れ」、「頬を赧くして垂頭きたる、其風情の伝吉には得も云はれず美しく愛らしき」、「未通気の羞かしきにや」とお濱への執心が語られる。一方、お濱は、「伝吉日毎に仁寿堂に出入り」する伝吉の執拗さに嫌悪感を感じており、恋愛の対象には到底考えられはしなかつたのだろう。伝吉はといえ、お濱の素振りが許嫁のように見えてしまつてゐるのである。伝吉は、残酷にも情報提供者定二郎による間接的な情報によつてしかお濱の気持ちを確かめることができなかったのである。

伝吉は高利貸しの竹村への返済期限日の夜に伊勢屋番頭の常蔵から金を借りる。常蔵は伝吉と同じように「自分店を持つ時の準備なれども」と、百八十何円の貯蓄をし、自分の資本の運用には積極的である。また、保証人の件に関しても、「確かなる保証人」という社会の法則に従つてゐる。「久しぶりに身なる下物の、喉から引込る、ばかりに覚えて、平生嗜みだけ酔も早く」とあるように、普段は衣服や酒などを節約しているようすが窺える。常蔵は、伝吉と同じように現金を貯蓄して、自分の店を持ち社会的に上昇することを夢みてゐたのである。

借入金の保証人は、仁寿堂の勝之助であるが、伝吉は勝之助に保証人の話を切り出すことができない。伊勢屋の番頭・常蔵は「予て主人に預け置きし金百八十何円に、主人より借用せし資金十五円」を懐中に入れ、伝吉の前へぽんと投げ出す。「お、お、おは、仁、仁寿堂の、お、お濱さん、お濱さんだ。畜生ッ、僕、

僕なんざア、「い、いの、命も入ねえ、入ねえち、ち、畜生ッ。でッ、でッ、伝さん」と言つた言葉は、常蔵の好色の眼差し以外のものではあり得ない描きかたである。常蔵の言葉は、伝吉の「春を思う心」を一層煽りたててしまふのである。また、彼の言葉は、伝吉を追い詰め「雪洞の火影にちらりちらり、花弁の梢頭はなる、風情」「覚えす見惚たりしが、我に還りし時、全身ぶるぶると戦慄ひぬ」という結果になつてしまつたのである。「ちらりちらり」「ぶるぶる」のリフレイン的な表現を生み、そこから心的な了解過程に入つていくのである。それは「われ知らず前後を見返りし眼光いと鋭く」と表現されている。伝吉の「眼光はいと鋭く」は、「口に毒を含まず、気軽に而も人と争はねば」と言う普段の伝吉と異なる非日常の知覚に訴えた不安が暗示されるのである。

常蔵の「金銭の狂暴性」は、日清戦争後急激に拡大した高利貸し・質屋であることに注目されねばならない。そこに当時の一般庶民の意識が、金銭の力への関心として反映してゐると考えられる。片山隆男は「社会の近代化から取り残されつゝあつた人びとや零細な商工業者に資金を供給した金融機関を庶民金融とよぶ」として、このなかで質屋が大きな役割を担つたと論じてゐる。

「麥目伝」に反映された時代の空気、生活難、金銭欲の鋭敏な感じは、この作品にあらわれる資本家階級に対する反抗と羨望のような満たされない望みが出てゐるのである。不用意のうちに時

代の影を写しているのではないかと考えるのである。経済的条件が優先する当時の風潮のなかで、人間性、金力、愛情との相剋などを取り組んだものだったのではないか。

常蔵は現金を蓄え、その自己資本を伝吉に貸付する。そこから得られた利息は、自分の資本を増やすためであったのである。常蔵と伝吉の人間関係は、「お金」のみに結びつけられ、精神的な心配りは考えられないのである。

金貸し・質屋は、近代資本主義の発展の中で特異な位置をしめ、零細な農民、小売商や雑業者は質屋からの金融にたよるほかなかった。『日本之下層社会』の中に「国家に銀行あり、貧民に質屋あり。しかも其の質屋は一般世間の質屋と趣を異にし、質草一円以上に出づるは少なく、大抵二十銭乃至三十銭、或は子供に何やらん風呂敷包を持たせて四銭五銭を借るも多し」と報告している。また、松原岩五郎は「危急なる場合の融通として質屋と貧民の間を往復する物件は、尋常一様の衣類什器に限らず、時としては煮たる食物、植えたる植物、生命ある家畜、塩噌の流動物もまた一時入替の質種として」と貧街の人びとの生活を報告している。日常生活用具等を買入しては早ければ当日中に請け出すという短期の利用がほとんどで、質屋にとつても結構な収入だったのである。明治末から大正初頭には、質屋の利用の仕方、臨時の出費に際しての利用へと変化していったのである。

伝吉は定二郎の甘言により眼がくらんでしまったこと、また質屋の番頭常蔵は、伝吉の情欲を煽りたてる結果になったのである。

る。

「伝吉のお濱への結婚願望は「人は美目より心」という母親の言葉、また、定二郎から伝えられる「人は美目より心ぢやないかね」というお濱の言葉に起因していると考えられる。

四 町内完結社会の崩壊

伝吉、母親以外の登場人物の「片輪者」に対する差別意識は、みな同様であった。母親が伝吉に言う「人は美目より心というぢやないかね。」は、「ひとなみならぬ身体」が心より優先されたのである。母親の「人は美目より心」という言葉から考えて見たい。

「変目伝」の舞台は、仁寿堂の薬種店で神田猿楽町にある。伝吉の埼玉屋の洋酒卸小売店は神田淡路町にある。東京時代初期の庶民の多くは、江戸時代の根生いの江戸っ子が多く、その生活行動圏もまた江戸時代とほとんど変わらなかった。東京庶民が肩を寄せ合い、隣人と協力

しあつて生活し、それと同時に、江戸以来のしきたりや伝統を重んずる、町内のつきあいが基本となっていた。小木新造は、このような社会を「町内完結社会」と呼んでいる。小木新造は、麹町区、神田区の本籍人口、寄留人口（東京府の定めた「戸籍書法」で、東京は自分の生まれた土地であっても本籍は父母の生地のご郷にあり、東京にあるのは寄留籍であるという意味）の比較を調

査している。その結果「下町は、その増加人口実数では山の手の二倍以上であることがわか」り、「下町の中に、私という町内完結社会の崩壊を導く因子、つまり寄留人口の事実が、明治十四年前後からすではじまっていたことを意味するのである」と記している。

地域社会が寛容さを失い、異質なる「片輪者」を排斥しはじめた時代になった。母親の「人は美目より心」という言葉は、血のかよひあった地縁的人間関係が息づいていた時代のものであった。明治二〇年以後には寄留籍のまま東京住まいをするものが圧倒的であった。それぞれ異なった故郷をもち、自ら住む東京には郷土愛のかけらほども感じない人びとの集合の場として東京は認識された³¹と記している。

勝之助は商売相手として伝吉を「あの正直な人」と認めながらも、「一寸法師だとか、変目伝だとか綽名をつけられて居る人と、馬鹿な評判でも立ちや、それこそお濱は一生廃人同様になるのだ」と、お濱の縁談が壊れるのを恐れている。「変目伝」の登場人物達は、血のかよひあった地縁的人間関係でないことが理解できる。町内完結社会は、東京庶民は肩を寄せ合い、隣人と協力しあつて生活する場であり、町内のつき合いが基本となる。極めて土着的な性格であつたのである。

伝吉の「片輪者」に対する差別は、他府県からの東京流人の増加がその要因になつていると考えられる。いまや「競争又競争、絶えて同業者の間に徳義存せざらんとす」と横山源之助は報告し

ている。「社会がナホ一家の如く、隣人の痛痒を見る、子弟の痛痒に於けるが如く、互ひに相扶助援引した」時代は終わったのである³²。

地域的・人間的な結合関係が解体し、横山源之助の言う「徳義の力」が失われたとき、町内完結社会の持つていた「抵抗力」を保つのは至難であろう。しかも、「競争社会では弱者は仲間をこそ蹴落として這いあがるほかなく」「人びとは自分だけの「家内安全」や「商売繁昌」を願うしかないのだ」と牧原憲夫は指摘する。牧原の言う自分だけの「家内安全」や「商売繁昌」は、仁寿堂の勝之助に見られる。すでに結婚の決まつてお濱が嫁入前の悪噂になると「お濱は一生廃人同様になる」「妹お濱が嫁入前の悪名を得んことを氣遣へる」と語られ、勝之助のしたたかさが描写される。お濱の本町の薬種屋との結婚は、勝之助にとつては、事業展開を見据えた業務提携により、仁寿堂を拡大させようとする経営戦略として捉えることができる。

東京の流入人口は急増し、土地への愛着も旧住民との一体感もない中で、伝吉は孤立していく。高利貸しの返済期限が迫つた伝吉は追い詰められる存在として描写されている。

五 伝吉の道行

伝吉の悲しい迷走については、これまで論及されてこなかった場面である。多数の地名が情景を伴っている点に着目していき

い。

伝吉は、追い込まれ「何とか思ひけん、我家の方角へは足を向
けず、水道橋より人車に乗り」とただ走る。伝吉は、質屋の番頭
を殺した後、語り手は「何とか思ひけん」「何とか思ひけん」と
いう言葉をくりかえし、読者を伝吉の走る方向に導いていくので
ある。

伝吉の走る姿は、差別された人間の受けるすべての鬱屈をとき
放つための逃走のように考えられるのである。桜の名所として上
野、老岐坂、王子、白山、巢鴨病院、王子。次は、柴井の共同墓
地、王子道、飛鳥山、根岸、道灌山、日暮里より谷中の墓地、芋
坂を根岸、上野の山中。桜は忍が岡に散り、上野東照宮鳥居近く
の丘陵にあった大仏、清水堂と桜の名勝としての地を走る。

『東京名所獨案内』は、次のように記述している。

① 白山神社を賽して傾城窪を通過して、巢鴨里や庚申塚右に進
めば瀧の川、楓樹を以て名高く王子稻荷社の畦は其岸高く有
ざれと蒼壁凜冽迂曲して、楓樹兩岸に沿ひて（中略）春の花
より紅いに偃松蒼翠交互して、錦繡（中略）飛鳥山は王子村
の南芝山にして桜多く春季花盛の時期は樹間に茶舗を設け貴
賤老若集ふ来て花下に酒宴を開き（中略）道灌山は飛鳥山の
東北望原頭広漠として筑波の山嶺霧々たり、（中略）日暮里
は此山続き、此辺寺院庭中は四季草木花絶えず、上野はもと
東叡山府下第一の巨刹清水観音や両大師東照宮等を残たり

（中略）清水寺の辺に在り此地は明治六年に公苑となり（中
略）満園の桜花爛漫天然の美観を添ゆる

伝吉が走りぬけた地はいずれも、花の季に應じて、東京庶民が
一日の憩いの場とした所であり、当時の庶民の遊樂地であった。
伝吉は、眺望の優れた場所を『東京名所獨案内』に示されている
番号の順に従って走っているのである。

このように地名を列ねることを、地名列挙とか地名尽しとか称
する。これを特色とする文体である。この部分を「道行文」と称
するのがならわしであると角田一郎は「道行文研究序論」で述べ
ている。『太平記』「俊基朝臣再関東下向事」における道行が、道
行文としてもつべき形式と要素とを併せもつに至っており、殊に
俊基朝臣の道行はその典型的なものと言う。それは旅路の経過を
一句ごとに、また数句置きに織りこんだ形式の文体である。

憂ヲバ留メ相坂ノ、関ノ清水ニ袖濡テ、末ハ山路ヲ打出ノ
濱、沖ヲ遙見渡セバ、塩ナラヌ海ニコガレ行、身ヲ浮舟ノ浮
沈ミ、駒モ轟ト踏鳴ス、勢多ノ長橋打渡リ、行向人ニ近江路
ヤ、世ノウネノ野ニ鳴鶴モ、子ヲ思カト哀也へ

文の間に多数の地名が情景を伴って描写されている。その間々
に道行の主人公の哀愁の心を語る言葉が織り込まれている。これ
を志田延義は「道行文とその言語的特徴」において、「哀愁に包

また人物の事柄に道中の情景を添えることによってその感傷を美化し、それに低徊することによって効果を高めようと企図せられたものといえよう」と述べている。右の志田の論から考えると、質屋の番頭を殺した伝吉は、「何とか思ひけん」という言葉を反復し、桜の名勝地として知られる地名に「道行文」の技巧が使われている文章である可能性が高いのである。伝吉の悲惨な運命は、道の景致を添えることによってその感傷を美化する効果が大きいのではないかと考える。この道行場面の語彙は、「染井の共同墓地」「谷中の墓地」「落花の痕」「晚鴉空しく」などの語から連想される「道行文」の技巧を見ることができるのである。

広津柳浪は、「作家苦心談」の中で、「『変目伝』は三夜で出来ました。」「私は明るいところでは書けませんでね、ひどく日を嫌います。大抵は夜やります。」この言葉から、「東京名所獨案内」を参照したと考えることができる。「道行文」の技巧を使い、眺望のすぐれた名所地を絡ませることは、仁寿堂から排除された伝吉の鬱屈をとき放つためではないか。

突き進んできた近代化への反省が、広津柳浪の冷徹な視座であったことの裏返しではないかと考える。

結

伝吉は、「人は美目より心」という言葉が引き金になって、お濱との結婚願望を持つことになる。醜い不具者である故に「春を

思う心こそ儘ならぬ」と恋をあきらめていた。母親の言う「人は美目より心」は、建前では、容貌の醜悪から目をそらせ、「心」が大切ということであるが、伝吉の母親以外の登場人物の本音は、伝吉の「変目伝、蜘蛛男」と綽名のある不具者ゆえに認めないのである。あからさまな差別的態度はとらなくとも内心ではその人のことを認めないという意識は、定二郎をはじめ勝之助やお濱にも共通だったと言える。一方、伝吉は「人は美目より心」の言葉によって、お濱との恋が「何とかなるべき恋ぞ」と夢を託すのである。伝吉の悲惨は、そうした人や社会の本音と建前に弄ばれたことが要因になっているのではないかと考えるのである。だが、大事なものは、弱者の伝吉が「女房とはなつて居ないけれども、約束してあるお濱と云う娘があります」という「一途な想い」が地域社会において社会的弱者を生み出すことが浮き彫りになっている。田岡嶺雲が「今の文明は中流以上の徒を悪徳に陥る、と共に、下流社会のものを擠して悲惨の谷に落す」と記している。明治二七年の日清戦争は、わが国の政治・経済・社会各方面において戦争前とくらべ格段の進展を示すと同時に田岡嶺雲の指摘する幾多の矛盾をも露呈していた。田岡は、貧しい者が富めるものから、「不具者」が健康者から、排除され隔離される場所ではなく、それらの不幸な人びとをもひとつに包みこむ世界を見ていたと考えるのである。広津柳浪の「変目伝」は、当時の資本主義社会における典型的な人物達が登場し、同時代が抱えていた諸問題を鋭く映し出している。広津は、その中で犠牲者たる伝吉

を殺人者として加害者に変え、最後に自滅させることによって社会批判を行ったのではないかと考える。

伝吉は「尋常」によって構成されている人たちの世界に同化しようとして努力したのであるが、差別と排除からのがれることはできなかった。先述の町内完結社会の崩壊により「徳義」の強制力が失われたことがよみとられるのである。伝吉の母親が言う「土方だの、人足だの、人に使役れてるぢやないかね。(略)顔にひつ、りがある位は、痘痕から見りや、お前何でもありやしないうよ」は、伝吉の湯傷よりも痘痕のほうが世間一般に差別されているという考えが見えるのである。この母親の言葉は、「差別劣位からの脱却を求める人びとの平等要求・上昇願望を、国家秩序の自発的な内面化の回路に導くことによって、国家の基盤と統合力をいっそう強化しつつ、より微細な(たとえは中学卒/小学卒から一流中学校/二流中学といった)差異が作られていく」と、同じである。伝吉の扱っている近代の象徴である洋酒は、時代の最先端の商品だった。産業社会の進展と物質主義による近代化は「人は美目より心」という町内完結社会の古き良き時代の幻想を打ち壊した。しかしながら、畸形異形な姿の伝吉は、近代国家の「尋常」な「国民」から排除されてしまう。

以上のことから、伝吉を励ますように言った「人は美目より心」という言葉は、お濱への結婚願望に変化していき、人一倍働き、洋酒屋の主として成功し表面的には認められていても、内心は「見世物芸人」の変目伝であったという結果に終わってしまっ

た。伝吉の「悲惨」は、人や社会の本音と建前に翻弄されたことにあるのではないだろうかと考える。

注

- (1) 『定本廣津柳浪作品集 上巻』廣津柳浪 冬夏書房 一九八二年二月
- (2) 『日本現代文学十二講』高須芳治郎 新潮社出版 一九二四年一月
- (3) 『読売新聞』明治二八年一月・同三月
- (4) 『早稲田文学』「不言不語を讀みて所感を記す」五〇一号 抱月子 明治二八年八月
- (5) 『変目伝の成立』「日本文学 八」塚越和夫 未来社 一九六八年八月
- (6) 『硯友社の文学』伊狩章 塙書房 一九六一年一〇月
- (7) 『読売新聞』「暗黒小説の功過」島村抱月 明治三二年五月
- (8) 『食生活近代史』(一六二頁) 大塚力(責任編集) 雄山閣 一九六九年六月
- (9) 『美酒一代』(鳥井信治郎伝) 杉森久英 毎日新聞社 一九六六年五月
- (10) 『神谷傳兵衛と近藤利兵衛』日統社編 日統社一九三三年五月
- (11) 『渡来葉の文化史』宗田一 八坂書房 一九九三年九月

- (12) 「大日本私立衛生会雑誌」第一一七号「漢方医継続に就いて」(二六年一月常会演説) 長谷川泰 一八九三年一月
- (13) 『供養の文学―広津柳浪論―』「国語と国文学」中丸宣明 一九八四年三月
- (14) 『現代日本医療史』川上武 勁草書房 一九六五年二月
- (15) 「黒蜩蛭」『定本 広津柳浪作品集 上巻』広津柳浪 冬夏書房 一九八二年二月
- (16) 『概説 薬の歴史』天野宏 葉事日報社 二〇〇二年二月
- (17) 『家政案内』「日用品百科全書 第四編」大橋又太郎編 博文館 明治二八年八月
- (18) 中等社会の出現―中流階級的生活感覚の成立―「服装文化」一六四号 小野一成 一九七九年一〇月
- (19) 『和洋住宅建築学 上・下』近代日本生活文化基本文献集―ひと・もの・住まい―明治・大正編 駒杵勤治/越本長三郎編 須原屋書店 明治四年四月
- (20) 「青年文」下流の細民と文士」田岡嶺雲 一八九五年九月
- (21) 『近代思想体系』「軍隊/兵士」加藤周一・由井正臣・藤原彰・吉田裕 岩波書店 一九八九年四月
- (22) 『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』西川長夫・松宮秀治編 新曜社 一九九五年三月
- (23) 『明治世相百話』山本笑月 有峰書店 一九七一年一一月
- (24) 『見世物の歴史』古川三樹著雄 山閣出版 一九七〇年八月
- (25) 『見世物研究』朝倉無聲 思文閣出版 一九七七年一月
- (26) 『最暗黒の東京』松原岩五郎 岩波書店 一九八八年五月
- (27) 『都市と技術』林武・古屋野正伍編 国際書院 一九九五年一月
- (28) 「庶民金融の変遷について」片山隆男「地域と社会」8」二〇〇五年七月
- (29) 『日本之下層社会』「横山源之助全集 別巻1」社会思想社 二〇〇一年一〇月
- (30) 『最暗黒の東京』松原岩五郎 岩波書店 一九八八年五月
- (31) 『東京庶民生活史研究』小木新造 日本放送出版協会 一九七九年一月
- (32) 『東京百年史』「東京人の形成」東京百年史編集委員会 ぎょうせい 一九七二年
- (33) 『客分と国民のあいだ』牧原憲夫 吉川弘文館 一九九八年七月
- (34) 『東京名勝圖会 東京名所獨案内』「復刻版」龍溪書舎 一九九二年七月
- (35) 『広島女子大学紀要』第一部 第一号 角田一郎 広島

女子大学 一九六六年三月

(36) 『日本古典文学大系 三十四』「太平記一」岩波書店

一九六〇年一月

(37) 「道行文とその言語的特徴」『言語生活』二〇一号 志

田延義 筑摩書房 一九六八年六月

(38) 「新著月刊」『作家苦心談』東華堂 一八九七年六月三

日

付記

・本稿における広津柳浪「変目伝」の引用は『定本廣津柳浪作品集 上巻』（冬夏書房 一九八二年二月）の本文に拠った。

・引用に際しルビは省き、旧字体は新字体に改めた。

（ひらた・えみこ 本学博士前期課程）